日本中国語学会々報　2016年12月

http://www.chilin.jp/

◆目次◆

ご挨拶　木津祐子（会長）……1
2016 年度全国大会総括……2
2016 年度学会奨励賞の選考経緯……4
支部例会実施報告　2016.6 - 2016.12……6
会則改正のお知らせ……15
会議報告……16
例会および全国大会開催のお知らせ……21
事務局からのお知らせ……21

ご挨拶

木津祐子（日本中国語学会会長）

2016 年度の日本中国語学会全国大会は、11 月 12 日・13 日の両日、秋晴れの別府において成功裡に実施されました。分科会の活発な議論、ポスター会場の熱気を目の当たりにし、参加した方々が大きな実りを手にされたことを確信いたします。是永駿学長・前田真砂美会員を始めとする立命館アジア太平洋大学（APU）のスタッフの方々には、馮勝利香港中文大学教授・陶紅印カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授の両講演など、すべての準備に大会開催校として献身的に当たっていただきました。学生さんの熱心なサポートも印象的でした。また、大会運営委員会や、各部会の司会に当たられた会員のご尽力にも、心より感謝いたします。

大会初日、行きは大分交通バスで会場に向かいました（帰りは亀の井バスを利用）。偶然の選択でしたが、朝日に輝く別府湾ののどやかさと、夜の静寂に噴出する鉄輪温泉郷湯煙の迫力を目の当たりにし、短い時間ながらも別府の自然を体感できる道中となりました。

別府湾の南岸大分市は、戦国時代、キリシタン大名大友宗麟が拠点を築いていました。豊後府内です。日中対訳資料としても重要な倭寇史籍のうち、『日本一鑑』の著者鄭舜功、『日本図纂』の基礎資料を編者鄭若曾に提供した蔣洲・陳可願、これら明末嘉靖年間の民間人士が、ともに嘉靖 34 年（1555）、政権抗争の敗者と勝者である二人の浙直総督から競うように派遣されたのが、この大友宗麟のお膝元豊後府内でした。九州には他にも有力な戦国大名が有った中で、浙直総督はなぜ豊後の大友氏を選んだのでしょう。長崎や五島列島は、当時中国から倭寇の頭目と目されていた王直の根城がありましたから回避するとして、中国から船で来航するには、博多や鹿児島に地の利（水の利？）があります。もちろん、硫黄鉱脈を押さえる大友氏の経済力と、

海外文化への寛容な姿勢など、語り得る要因は幾つかありますが、一直線に和泉まで繋がる瀬戸内航路を中国航路に繋ぐ結節点として、当時の豊後大分が極めて大きな潜在力を有していたことを忘れるわけにはいきません。

大友氏が、長らく中断していた勘合貿易の主導権を得ようと、独自に明に使者を送るもあえなく拒絶されたのが嘉靖 35 年（1556)、その翌年には、鄭若曾と蒋洲が、大友氏から侍僧一人ずつを公平にあてがわれて帰国の途についています。大友氏は、日本国王として日明交易の表舞台に立つことは叶わなかったものの、明末中国のもう一つの心臓部浙直総督との間には、確たる太いパイプを有していたのです。今回、瀬戸内の水を豊かに受け止め、広々と穏やかに広がる別府湾を車中から眺めつつ、今から 460 年前の大分別府湾の光景を想像しないではいられませんでした。江戸時代の絵図に描かれる長崎のように、別府湾が海外交易港として栄えた可能性も有ったわけですから。そうであれば、私が研究している唐通事の根拠地も、長崎ではなく豊後となっていたかもしれません。

私が乗ったバスは、停留所ごとに各国の留学生をのみ込みながら APU への坂道を登っていきました。460 年の間に、海外交通も文化交流もすっかり様相を異にしましたが、九州がその中で独自の位置を占める情況は変わり有りません。今回、この別府湾を眼下に収めて全国大会を終えることができたことは、個人的にもとても意義深いことでした。

来年の開催は、中央大学八王子キャンパスが会場となります。会員各位がそれぞれの研究成果を手に、次は東京で再会されますことを祈っております。

2016 年度全国大会総括

Ⅰ．今年度大会総括

第 66 回全国大会は、立命館アジア太平洋大学（大分県別府市）を会場に、11 月 12 日（土）と 13 日（日）に開催された。

（1）参加者数

参加者総数は 235 名、うち一般参加者が 233 名、招待者 2 名であった。

（2）総評

今年度の全国大会は、ほぼ例年通り 11 月半ばの開催であった。幸い天候にも恵まれ、別府湾を見下ろす高台にたたずむ立命館アジア太平洋大学(APU)のキャンパスは、高原を思わせるさわやかな空気で我々を出迎えてくれた。開催校の APU には大会までの長期に亘り、周到かつ万全な準備をしていただいた。また、大会当日とりわけ印象的であったのは、国際色豊かな学生スタッフによる礼儀正しくきびきびとした行動である。このような APU の皆さんによる献身的なご努力により、たいへん実りある大会を開催することができた。

初日には、香港中文大学・馮勝利教授「从语音、语义、词法和句法看语体语法的内在机制」と、カリフォルニア大学ロサンゼルス校・陶紅印教授「汉语自然口语语料库在研究和教学方面的建设与利用」の二つの招待講演が行われた。馮教授の講演は、「語体」を軸とする文法体系の構築に関するものである。馮教授

によれば、「語体」とは diglossia（二言語併用）や register（言語使用域）よりも大きな概念であって、言語のさまざまなレベルに影響を与える。講演では、生成文法により生み出された特定の形式は、コミュニケーションにおける特定の対人関係調整機能を有するという「形式―功能対応律」を前提に、音韻・韻律・意味・語彙・統語の各レベルにおける諸現象の解釈に、「語体」の援用がいかに有効であるかが具体例を以て示された。馮教授は韻律文法理論の主唱者としてつとに著名であるが、今回の講演は、それと併置されるべきもうひとつの文法体系としての「語体文法」を提唱するものであって、その構想はきわめて遠大である。次に陶教授の講演は、言語研究と外国語教育における口語コーパスの有用性についてのものであった。講演ではまずコーパス構築の歴史と現状が紹介され、書面語に比して口語のそれがいまだ不十分であるとの指摘がなされた。その上で口語コーパスが、たとえば音変現象の分析に対して非常に有効であることが実例を以て示されるとともに、韻律・語彙・文法・談話分析等の研究に対しても有益な示唆を与えうることが指摘された。同時に陶教授が強調されたのは、口語コーパスの構築が韻律の習得など中国語教育においてもきわめて有用であるという点であった。司会進行は大阪大学・古川裕会員が担当され、講演終了後にはフロアーも含めた活発な議論が行われた。

今年度のワークショップは、1 グループがセッションを行った。

大西克也会員の企画による「中国語史における疑問詞の指示特性――〈人〉を解とする疑問詞を中心として」がそれである。同一メンバーによるワークショップは第 63 回大会（2013 年度）に続いて 2 度目であり、今回は疑問詞の指示特性の分析を通して、＜属性記述／対象指定＞及び＜個の指定／範疇の指定＞という二重のカテゴリーが中国語史において汎時代的に有効であることを、木村英樹会員・大西会員・松江崇会員・木津祐子会員が各時代を分担して論証した。司会は小野秀樹会員が務めた。

ポスターセッションは昨年同様、二日目の昼の時間帯に開催された。セッションはメイン会場となる建物の 1 階ガエリアで行われたが、ここは分科会会場と昼食スペースを結ぶ動線上に位置し、多くの参加者を集めるのに最適な場所であった。随所できわめて活発な議論が展開されたことは言うまでもない。

開催校のご尽力により、今年度も前回大会に続いて託児室を設置することができた。家庭生活と研究との両立は、託児室の設置が解決するものではむろんないが、大会参加の障壁を少しでも取り除くべく、今後も委員会として模索を続けていきたい。

今大会を振り返ったとき特に印象に残るのが、先にも述べた APU の学生スタッフのみなさんの清々しい働きぶりであった。スタッフの中には多くの留学生もいらっしゃったが、あの日学会に参加されたことが少しでも若い方々の刺激になることを願わずにはいられない。APU のみなさんにはこの場を借りて厚くお礼申し上げたい。

（3）改善点・反省点

今回は準備段階及び大会当日ともトラブルは比較的少なかったように思われるが、それでもいくつか問題が発生した。

まず、研究発表応募書類中の「審査用要旨」に、規定字数を超過するものが複数見られ、そのうち超過程度の甚だしいもの 1 件を規定

違反により失格とした。いずれも学会ウェブサイトからダウンロードしたファイルの書式を変更して使用しており、このような改変を見逃すことは公平性の観点からも看過できず、来年度に向け対策を取る必要がある。なお、同様に書式に関わる問題は予稿集の提出原稿にも発生している（後述）。

また、当日の分科会発表に関しては、複数の司会者から、予稿集の内容と会場で用いられた PowerPoint 画面との間に著しい齟齬のある発表が複数見られたとの報告が寄せられた。現在ではほとんどの発表者が PowerPoint を併用しているが、予稿集との関係でその使用法に常識を欠くものが散見される。今後これらについてはウェブサイト上で注意を喚起していきたい。

さらに、やはり司会者のお一人から、会場における写真撮影のマナーについてご指摘をいただいた。本人に断りなくカメラを向けるのはやはり常識に反する行為と考えられるので、大会時に掲示を出すなどの対策を取る方向で考えていきたい。

Ⅱ. 来年度の全国大会にむけて

（1）来年度の第 67 回大会は、中央大学多摩キャンパス（東京都八王子市）で開催される。開催日は 2017 年 11 月 11 日（土）、12 日（日）の予定である。

（2）来年度も初日の企画は招待講演 1 本及びワークショップとし、二日目に分科会発表及びポスターセッションを行う方針である。ワークショップの応募に関しては、1 月末までに学会ウェブサイトに応募要項を掲載するので参照されたい。

（3）来年度も研究発表の応募規定はウェブサイトでの告知のみとする。4 月初旬頃までに学会ウェブサイトに掲載されるので、その要領に沿って応募されたい。「審査用要旨」については、今年度の反省を踏まえて「応募規定」を変更し、ウェブサイトで配布するフォーマットの書式変更を認めない方針である。詳細は追って告知する。また、予稿集投稿規定については現在委員会と開催校において検討中である。やはり後日ウェブサイトに掲載予定であるので、発表希望者は注意されたい。

（4）今年度大会では委員の中から 1 名を「予稿集編集サポート」担当として指名し、開催校の依頼に基づいて編集の実務に従事してもらった。今後も引き続き開催校の負担軽減と簡素化に取り組む方針である。会員各位のご理解とご協力を切にお願いする。

（大会運営委員会）

2016 年度学会奨励賞の選考経緯

編集委員会では、2016 年 3 月の第 1 回編集委員会において、『中国語学』262 号に掲載された論文の中から学会奨励賞の選考対象とする論文 3 本を選出し、さらに 5 月に開かれた第 2 回編集委員会において、選考対象論文 3 本について慎重な協議を行った結果、以下の 2 論文を 2016 年度の学会奨励賞受賞論文の候補とすることに決定し、この案が理事会において承認された。

学会奨励賞受賞論文
(1) 八木堅二氏（京都大学・非常勤講師）
沁源交口方言における単字調の変化過程
(2) 宮島和也氏（東京大学・大学院人文社会系研究科博士課程）
戦国楚・秦における前置詞「于」「於」をめぐって

【選考の経緯】

(1) 八木堅二氏論文

山西省沁源県交口郷方言では、単字調が 7 調類から 3 調類に単純化する声調変化が進行中である。本論文は、75 人のインフォーマントに対する調査から得た年代別データを利用し、その変化過程を詳細に跡づけた。内省調査・聴覚実験・ピッチ曲線解析を有機的に統合した共時的・通時的声調分析方法を用いることにより、調類の単純化及びその背景となる声調調値の漸進的な接近過程を微視的に解明することにおおむね成功している。聴覚実験においては、内省調査では弁別できなかった調類が部分的に聴覚上弁別されていることを示し、ピッチ曲線解析では、相反する方向への調値変化が生じる場合があることを見いだした。調類単純化の原因となる調値変化が中域的で平板的な調形に集約する傾向にあることも、交口郷方言について実証した。

本論文は、豊富な年代別調査データを周到かつ独創性のある方法を用いて分析することにより、十分な確度・説得力を有するとともに中国語方言学のみならず一般言語学的にも有意義な結論を導き出している。また、本論文が提示した分析方法は、今後の共時的・通時的声調研究を大きく進展させる可能性を秘めている。以上が編集委員会により高く評価され、全会一致で奨励賞受賞論文として推薦するはこびとなり、それが理事会で承認された。

なお、審査段階では、相反する方向への調値変化が同時に出現しうる原因に対する分析が十分とは言えないことなどが指摘された。このように調値変化過程の細部に関してはさらに検討を進める余地を残している。中国語学における実験音声学は、近年、進展が著しくまた競争が激しい分野である。八木氏の研究のさらなる発展を心から期待している。

(2) 宮島和也氏論文

本論文は上古中国語の前置詞「于」と「於」の関係について論じたものである。上古の「于」と「於」には意味機能・音形の両面において類似性がみられるため、これらを同一語の表記上の違いとみなす説、文法機能の相違のある類義語だとみなす説など、従来、様々な学説が主張されてきた。本論文は、両者に文法機能の差をみとめた代表的な研究である Karlgren1926 を批判的に検証し、その問題点を指摘した上で、戦国楚簡・秦簡といった出土文献を主資料としつつ、「於」は「于」よりも遅れて生じた同一語｛yu｝の表記バリエーションであり、｛yu｝が軽読によってその合口性を弱め、表記「于」との音声上のずれを生じた結果、その違和感を解消するために「於」で表記されるようになったこと、この表記交替の進展には使用頻度の高低が影響し、｛yu｝の使用頻度の高い楚もしくは中原地域から使用頻度の低い秦に伝播したと推定されることなどを主張している。

本論文は、地域間における「于」「於」の分布の違いを浮かび上がらせた上で、両表記の地域的差異も含めた通時的変遷のプロセスを包括的に説明し得る仮説を提出するのに成功

している点で、従来の説とは一線を画すものと言える。また、時間軸と空間軸とを有機的に結び付けた視野の広い方法がとられていること、言語資料の扱いが周到なこと、「於」という表記の成立背景を分析する際、文法・音韻・文字の各要素を総合的に勘案する精緻な方法がとられていることなども積極的に評価され、編集委員会において全会一致で奨励賞受賞論文として推薦され、理事会で承認された。

審査の段階では、「于」と「於」との文法機能上の差異を検討する方法が十全とは言えないこと、言語学用語の運用を含めた文章表現に改善の余地があることなどの問題点も指摘されたが、これらは本論文の価値を大きく損なうものではないとみなされた。今後、以上の問題点の見直しを含め、さらなる研究の進展を期待したい。

（編集委員会）

支部例会実施報告　2016.6 - 2016.12

◆北海道支部例会

◇2016 年 9 月 23 日（金）小樽商科大学

・張弘悦（新潟大学・院）：結果補語における“～好”と“～成”についての比較研究

談話で多用される結果補語“～好”と“～成”は、従来の研究において、両者の文法的使い分けと意味的相違については十分に分析されてきたとは言えない。本発表では、次の３つの観点から“～好”と“～成”を分析し、両者の特性の異同を明らかにする。(1) 結果補語の構文における“～好”と“～成”の振る舞いを統一的視座で検証し、両者の共通点と相違点を解明する。(2)“～好”と“～成”が動作・行為の完了を表す結果補語として機能する用例を観察しつつ意味論的観点から比較し、統一構文での置換可能性を検討し、両者の特徴を明らかにする。(3)“～好”と“～成”を動詞と目的語の機能分類の観点から比較対照する。

・楊安娜（北海道大学・院）：「動詞＋方向補語」と「動詞＋“到”」の機能差異について

本発表では、現代中国語における「動詞＋方向補語」と「動詞＋“到”」の意味機能の相違に着目し、先行研究（中根 2005、2008；杉村 2011 など）により議論されながらも、未だ解決をみない諸問題―「動詞＋方向補語」と「動詞＋“到”」における〈限界性〉〈過程性〉の有無、副詞「正在」との共起状況など―を検討する。このことにより、「動詞＋方向補語」と「動詞＋“到”」の本質的な機能差異を明らかにすることを試みる。

・山田大輔（北海道大学・院）：漢訳仏典における“VP 已”の機能拡張に関する一考察―時間副詞“既”との関係から

漢訳仏典では動詞句(VP)に完結動詞“已”が後接した“VP 已”という形式がよく見られる。蔣紹愚(2001)は、“已”には“食”“洗”などの「持続動詞」に後接する「已 1」と、“得”“到”などの「非持続動詞」に後接する「已 2」の二種類があり、「已 2」は原典言語の翻訳のために出現したとしている。本発表は、5 世紀ごろの漢訳仏典で時間副詞“既”の使用が急増していることをもとに、「已 2」の出現を言語的に可能にしたのは

“既”なのではないかと考える。すなわち仏典の翻訳では、“VP 已”を“既”と同様の使用環境で用いたり、両者を共起させたり（“既 VP 已”）することで、「已 2」が生み出されたと考える。

◆関東支部例会

◇2016 年 7 月 9 日（土）首都大学東京

・神野智久（大東文化大学・院）:“进”と“出”の非対称性について―「連続性」という観点から―

本発表は、“进”と“出”の非対称性について、「連続性」という観点から分析する。「連続性」とは、事象 A が、事象 B に先立って生起し、事象 B が事象 A に依存して生起することを指す。両者は、有標・無標として言語現象に現れる（例えば、肯定と否定の関係）。この「連続性」を、“进”と“出”に当てはめると、“进”で表す「着点への移動」は、“出”で表す「起点からの移動」に依存しないが、逆はその限りではないことがわかる。つまり、“进”と“出”は有標・無標の関係なのである。更にこの連続性は、垂直軸の移動の分析にも有効であることも示唆する。

・林佩芬（南山大学・非）:「数量詞＋形容詞」の中国語表現の特徴

“这条鱼 3 斤重”のような表現においては、数量詞“3 斤”は形容詞“重”と共起する。このような場合には、形容詞を取り除いたとしても、構文として許容され、「知的意味」は同一となる。他方で、形容詞の付加が、構文上、必要条件と思われる場合や、通常、形容詞を付加しない場合も存在する。そこで、本報告では、形容詞が付加された表現と付加されていない表現との間には、何らかの相違があると考え、形容詞が付加される・付加されない数量詞表現について考察し、「数量詞＋形容詞」の統語的、意味的な特徴を明らかにする。

◇2016 年 9 月 3 日（土）お茶の水女子大学

・林如（お茶の水女子大学・院）: 从焦点理论浅析动词后的“了”的焦点提示功能

本文旨在厘清汉语连动句中焦点结构的含义，试证明在连动结构的范围内，动词后缀“了”具有焦点提示的功能。本文在刘勋宁（1999）提出的“汉语 VVf 原则”的基础上，提出动词接辞“了”是较弱的焦点标记词的观点。首先，概观语言学中常用的常规焦点性质判断法、并列结构判断和否定结构判断法三种焦点判定方法及焦点标记的判定方法。然后，在此基础上对现有文献的例句进行测试，力图在连动结构范围内判定动词后缀“了”提示的词是否为焦点。最后提出在连动结构中动词接辞“了”是较弱的焦点标记词的观点。

・郝静（お茶の水女子大学・院）: 离合词的语义对表示人的成分的影响

有的 AB（本文 AB 指双音节离合词）中间可以插入 X 人(本文 X 人指表示人的成分，人的成分又指表人的专有名词或人称代词(＋的)，有的则不能。本文只限于考察“YAXB”式中的 X 人与 Y 人(Y 人指与 X 人不同的表示人的成分)的语义关系。明确 YX 的语义关系的好处之一是可以给 AB 分类，从而缩小≪现代汉语词典≫中离合词的范围，更便于分析离合词与其插入要素之间的联系。关于 X 人的语义，已有大部分研究表明其为受事。但也有认为 X 人是施事的研究。本文认为 X 人为受事，但是 AB 的不同会导致 Y 人的语义发生变化。Y 人的语义可表现为施事，致事，客事等。

・許芸涵（新潟大学・院）: 様態描写における“着”と“起来”の意味的相違

“着”と“起来”は様態描写と共起できる。様態描写で、両者を比較する研究はほとんどない。本研究は、“着”と“起来”と様態描写の共起状況を明らかにする。“着”と共起できる様態描写は、物事の性質と状態を表す様態、程度が強い様態、あ

ることに対する評価を表す様態、一種の習慣を表す様態と方式を表す様態である。“起来”と共起できる様態は、物事の性質と状態を表す様態、程度が強い様態、突然な変化を表す様態である。また、同じ様態描写文で、“着”と“起来”の置換状況を究明する。置換可能の場合は、意味論から両者の意味的相違を解明する。置換不可能の場合、文法上の制約要因を究明する。

◇2016 年 12 月 24 日（土）日本大学

・齋藤萌（お茶の水女子大学・院）:「テイル」形に相当する中国語表現の語用論的機能に関する考察―心的状態を表す動詞から出発して―

動作の進行や状態の持続を表す日本語の「テイル」形は、中国語では“在+動詞”や“動詞+着”が用いられ、その対応関係について盛んに研究が進められてきた。心的状態の持続を表すテイル形構文について調査を行った結果、多くは中国語では動詞のゼロ形式を用いて表現されることが観察された。本発表では、「テイル」形の意味解釈と日中の心的状態を表す動詞の意味特性について確認し、中国語への対応と“在”、“着”、“動詞のゼロ形式”の語用論的機能を考察する。「テイル」形のもつ〈報告性〉という機能は中国語では“在”が、〈現象描写性〉の機能は“着”が、〈客観性〉の機能は“動詞のゼロ形式”がそれぞれ担うことを提案する。

・王芸嬛（お茶の水女子大学・院）:“因为”句与“既然”句的预设差异浅析

传统研究认为，“因为”句（即说明因果复句）和“既然”句（即推论因果复句）都属偏正复句，原因分句为偏，结果分句为正。但两者在实际应用上有很大区别。首先，“因为”句中的原因分句可以被焦点化、疑问化和否定化，“既然”句则不能。从两者与推测词的共用情况来看，“可能/也许/大概因为”常说，但“可能/也许/大概既然”则很难讲。本文针对“因为”句和“既然”句的预设与焦点成分进行分析后，发现两者的区别是，“因为”句中，“因为 p”整体做句子焦点，而“既然 p”则是句子的预设成分。也就是说，“因为”句中更强调原因，“既然”句更强调结果。

◆東海支部例会

◇2016 年 11 月 26 日（土）中京大学

・許諾（新潟大学・院）：中国語の情態動詞に関する研究 ―“要”と“想”の使い分けについて―

中国語の“要”と“想”は、「意志」や「願望」、つまり情態の意味を表し、談話において頻用される動詞である。しかしながら、従来の研究では、“要”と“想”が談話において実際にどのように使い分けられているのか、またその使い分けがそれぞれのどのような意味特性の相違に基づいているのかという基本的な問題には十分な説明が与えられてはいない。本研究発表では、動力情態という視点から、「意志」や「願望」を表す情態動詞“要”と“想”を比較対照することによって、それぞれの語意特性、構文における振る舞い、語用上の特性の異同を明らかにする。

・望月雄介（名古屋大学・院）：中国語会話における聞き手の言語行動 ―「語り」に対する聞き手の働きかけ―

日常会話において、会話参加者は発話交替に伴い話し手にも聞き手にもなる。話し手の発話に対して聞き手が無反応であれば、会話が中断される可能性もあり、一方で、聞き手が質問等をして話し手に働きかければ、会話が継続される可能性もある。会話において、聞き手としてどう振る舞うかは、話し手としてどう振る舞うかと同様に重要であると思われる。ところが、中国語会話における聞き手の言語行動に関する研究はこれまでほとんど行われていない。

そこで、本発表は中国語会話において話し手が経験、意見等を述べる「語り」に対する聞き手の反応や働きかけに着目し、談話分析の観点から聞き手の言語行動を分析する。

・勝川裕子（名古屋大学）：“可以”の伝達機能と語用論的特徴

中国語の助動詞“可以”は、従来〈可能〉の範疇で取り上げられ、「許可されてデキル」の意味で導入されることが多いが、この他にも〈依頼〉や〈意向〉、〈勧め〉といった様々な伝達機能を有しており、語用論的にも同じ可能範疇に属する助動詞“能”とは対照的な特徴をみせる。本発表では“可以”の中核的意義について再検討した上で、“可以”がどのような伝達機能を有し、それぞれが何を基盤として結びついているかについて考察していく。また、〈許可〉から〈勧め〉へと拡張する動機づけを「評価のモダリティ」と「行為要求」という観点から考えてみたい。

・丸尾 誠（名古屋大学）：中国語の結果補語“掉”の用法について ―完遂義を中心に

結果補語“掉”の基本義として「離脱」（例：飞掉）、「除去」（例：吃掉）などが挙げられる。“洗掉”の表す「(汚れを）洗い落とす」は後者に基づくものだが、これに加えて「洗ってしまう」という動作の完遂・終結の意味も表せる。さらに“把衣服洗掉”では、対象である服が複数存在するという解釈が優勢であり、完遂を表す“掉”の使用には「量的な概念」との関連を見出せる。また、“掉”の使用により、行為者が当該の行為を他者から強いられて（往々にして不本意ながら）行うといったニュアンスが前景化される。本発表では“V 掉”の完遂義としての用法に見られるモダリティ的な側面にも注目しつつ、補語“掉”の使用の動機づけについて考察する。

・張勤（中京大学）：意志を尋ねるということ

言語は表現することができないことはないというテーゼからすれば、中国語も日本語も意志について尋ねることができるということだ。しかし、「意志を尋ねる」という言語行為は、中国語と日本語とで果たして性質を同じとする行為であろうか。「砂糖をお持ちしましょうか」がそのまま中国語では言えないということ、さらに“我想把糖拿来吗？”も直接的には質問という言語行為ではないということからして、この問題は、中日両言語の表現の異質性を観察するよいヒントを与えてくれる可能性があると考えられる。本発表では、この問題について整理して考えていき、現段階での発表者の考えをまとめることを目的とする。

◆関西支部例会

◇2016 年 6 月 19 日（日）大阪大学

・田婧（大阪市立大学・院）：建安七子の作品における押韻状況の考察

本発表は、建安文壇の中の名高い文人たち―建安七子を視野に入れて、彼らの作品における押韻状況を考察してみたい。七人の作品から、韻を踏んでいない作品を除き、韻字を整理し、十六摂に分ける。その中において、さらに韻字を分類し、検討を加えていく。また、主に以下の点から考察を進めたいと思う。まず、建安七子の作品の押韻状況から、異なる声調の押韻現象が確認される。こうした通押現象を整理し、検討を加えていく。次に、建安七子の出生地の方音の影響は、作品の押韻状況の中ではどのように反映されるのを考察してみたい。最後に、建安七子の作品から見出された押韻の傾向や方則の、上古音の押韻分類との繋がりに考察を加えたい。

・季鈞菲（神戸市外国語大学・院）：『新集蔵経音義随函録』における重紐の対立について

仏典の音義は、仏典の中で使われる漢字の発音と意味を説明するものである。その

ため我々は、音義から仏典の成立した時代の豊富な音韻事実を探り出すことが可能である。『可洪音義』は典型的な音義書であり、豊富な音韻材料を提供してくれる。近年の研究は既に『可洪音義』の版本、音韻体系、異体字など、様々な面で豊かな成果を挙げているが、細部にはまだ検討する余地がある。特に中国音韻史上の難問の一つ、「重紐」の考察はほとんど言及されていない。本発表ではこの問題を中心に考察する。それにより、一面では従来の研究を補足でき、他面においては『可洪音義』から唐五代（宋の初頭）における重紐の状況を明らかにできるであろう。

・李梦迪（神戸市外国語大学・院）：北京话中“给”作处置式标记的来源初探

在现代汉语特别是北京话口语表达中，常常可以看到以“给”为标记词的处置式，而关于“给”表处置义的来源问题，学界一直存在争议。处置式通常被视为高及物性结构，处置对象则为强受动性成分。本文认为“给”由给予动词发展为处置义标记的动因主要可从“给”后宾语（NP2）受动性提高的角度进行分析。清代中叶文学作品中的一些“给”字句含有针对 NP2 施加负面影响的意味，而与“给”引介受益者情况相比，强制性“施加”会使 NP2 体现出较强的受动性，同时“给”表处置的含义也会得到强化。引介受损者这一功能的实现是促使“给”向处置义标记演化的一个重要环节或者说动因。

・王琦（神戸市外国語大学・院）：授与動詞の文法化に関する日中対照 ―「視点」を中心に―

日本語と中国語には、双方とも事物のやりもらいを表す授与動詞が存在し、両言語におけるそれらの授与動詞は、いずれも文法化を経て、多様な用法を有する形式に発展している。本発表では、「(て)あげる」、「(て)もらう」、「(て)くれる」と“给”に関する幾つかの構文を取りあげ、空間的視点、発話者の視点、心理的視点等から両言語を対照する。結論は、通常指摘されるように「視点の一貫性」は日本語の大きな特徴の一つであり、それは、日本語の授与動詞の用法にも体現されるので，日本語の授与動詞構文には「視点」に関する制約がある。一方、中国語における「視点」は自由であり、“给”構文においても「視点」の制約は存在しない。

・肖海娜（神戸市外国語大学・院）：中国語における感情表出型名詞一語文の意味機能について

現代中国語には、日本語と同様に、①“哇，好/多漂亮的花！”、②“啊，老鼠！”、③“(客に向かって）票！”等の、名詞句による独立文が存在する。先行研究において当該構文は、①“咏叹事物的属性”、②“引起注意”、③“表示祈使”を表すとされてきた。本発表ではまず，中国語には以上に加えて記憶に基づく用法が存在することを指摘する。例えば、中国語では無くしてしまって目の前に存在しない腕時計を思い出しながら“我的手表呀！”と発話することが可能である。本発表では、話し手と感動対象との時空間的位置関係から、当該構文の形式と意味機能を体系的に示す。

◇2016 年 12 月 18 日（日）関西学院大学

・肖海娜（神戸市外国語大学・院）：マイナス評価構文に関する日中対照―“张三这个混蛋!”と“这个虚伪的家伙!”―

日本語と中国語には何れも話し手が特定の対象に対して何らかの不満を表出する特定の構文が存在する。従来の研究では悪口、悪態、罵語などと呼ばれ、主として、人類学、社会言語学、社会文化の角度から論じられてきた。本発表では、このような言語表現には形式と意味機能の対応関係が存在することを確認した上で、「マイナス評価構文」と名付けることとする。まず、形式的側面に着目し中国語の当該構文には同格関係の“张三这个混蛋!”型と修飾関係の“这

个虚伪的家伙!”型の二種類があることを指摘する。そして、意味機能の側面からそれぞれの構文に見られる相違点を観察し、最後に日中両言語におけるマイナス評価の意味機能の異同を記述する。

・邱旭元（京都大学・院）：古代中国語における目的語倒置について―易経を例として

本発表は目的語倒置という古代中国語に特有の文法現象について、それがどのような理由で生じるのかという問題点から出発し、目的語倒置の用例を集めそれらを用法別に分類することを目指している。現代標準中国語では、一般的に目的語を動詞或は介詞（日本語の助詞）の後ろに置くが、古代中国語では、目的語を動詞或は介詞の前に置く例がしばしば見られる。本発表では、古代中国語における目的語配置について『易経』六十四卦中の用例を調べ、十二種類標識作用字に基づき分類を行い、目的語倒置の理由について考察を加えたい。

・張岩（神戸市外国語大学・院）：再论汉语动词的方向性兼与日语比较

动词的方向性这一语义特征已被部分学者注意到但并未得到重视。从目前来看，部分学者对动词动向范畴的界定来源于某构式。比如，邱广君（1999），张国宪（2011）。而我们认为用构式来确定某动词的方向性有一定的风险性。原因之一是构式义一般都大于组成构式的各部分的语义之和。本文将通过对张国宪（2011）反动，运用义项分析，认知图式和对比的方式，重新认识动词的方向属性。从而指出以下倾向性:①能入张国宪（2011）构式的动词，一般都为移动动词;②移动动词不一定带有方向性;③移动动词方向性的明确必须依靠补语或介词等语法手段。

［講演］

ラマール・クリスティーン［Christine LAMARRE］（フランス国立東洋言語文化学院 Inalco／東アジア言語学研究センター CRLAO）：副詞“一”の語りにおける背景化機能

この発表では、語りにおける人物の素早い身の動きの描写に貢献する“一Ｖ”のテクスト機能を論じる。とりわけ、議論を身体・表情の動き（位置変化をもたらす動作を含む）という頻度の高い表現に焦点を当て、人物の発言の背景動作を導入する副詞“一”の機能を取り上げる。“一”のこのテクスト機能はその一回アスペクトマーカーの機能、つまり出来事の「結果性の取り消し」機能と結びつくということを主張する。例文の分析を通じて、“把”構文でも“把 N 一 V”の形をとると語りの進展に貢献しないただの背景としてとらえられることを示す。コーパスは 1950 年代の軍事小説《林海雪原》を用いる。日本語・英語における対応表現も視野に入れる。

◆中国支部例会

◇2016 年 10 月 23 日（日）広島大学

・大嶋広美（広島大学）：江西省信豊県正平客家語の音韻的特徴

本発表では、江西省信豊県正平鎮球獅畲族村（背村）客家方言の音韻的特徴を概観的に述べる。発表者が調査した球獅畲族村は畲族と漢族が住む村であるが、畲族、漢族ともに同じ客家方言を使用し、その方言には広東省、福建省、江西省、浙江省など各地の畲話の共通した顕著な音韻的特徴がほとんどみられない。信豊県は江西省南部地域に属しながら、言語学的には贛県周辺で使用されている客家方言よりもむしろ隣省の広東省南雄市東部方言（上方話）に近く、上方話との音韻的共通点が多くみられる。上方話、信豊客家方言の音韻体系と比較し、その音韻的差異について一端を紹介する。

・呉天一（広島大学・院）：現代中国語敬語体系に関する一考察 ―「杜拉拉昇職記」のコーパス分析を中心に―

現代中国語における敬語研究はこれまでにも少なくはないが、基本的には“尊”、“令”、“屈”などの接頭辞や、語のレベルからの考察を主とするものであった。しかし、ここ 20 数年の経済発展にともなう社会変化の中で、敬語表現にも一定の変化が見られ、新たな反復疑問文などを使った言い回しによる表現も多くなってきている。そうした新たな表現を分析するためには、これまでのような語のレベルでの研究ではない新たな手法が必要と考えられる。本発表では、職場生活を背景とする小説『杜拉拉昇職記』を中心に、ここ 20 年で広く使われるようになった敬語表現を調査し、現代中国語の敬語の変化の様相を検討したい。

◆九州支部例会

◇2016 年 7 月 9 日（土）久留米大学

・薛晨（熊本大学・院）：中国語ニュース見出しにおけるテンス・アスペクト形式の使用状況について―『人民日報』のネットニュースを中心に

アスペクトの表現形式というと、日本語では、動詞のシテイル形式とスル形式で継続相と完成相の対立を表しているのに対し、中国語では、動詞の語形変化がないため、主に、動詞の後につく助詞“了”、“着”、“过”によって完成相、継続相、過去相が表現されると思われている。しかし、実はそれらの助詞だけでなく、“正”、“在”、“正在”、“已”などの副詞もアスペクト意味を表せる。また、未来のことを表す時、よく“将”、“要”などの副詞が使われる。今、ニュース見出しは特殊な文体表現として重要な役割を果たしている。本稿では中国語ニュースの見出しに着目し、それにおけるテンス・アスペクト形式の使用状況とその構文特徴を究明する。

・王姝茵（熊本大学・院）：『醒世姻縁伝』の親族呼称語“大嫂”についての考察

今回の報告は、『醒世姻縁伝』の親族呼称語“大嫂”に対する考察をおこなう。『醒世姻縁伝』中の“大嫂”は 99 条出現する。そのうち、「兄の妻」という意味の“大嫂”が 2 条で、他の 97 条は非親族の既婚女性への呼称語である。先行研究では、その 97 条の“大嫂”は「親族呼称語の拡大化」だと主張する。(黄悦（2012）：「『醒世姻缘伝』の親属称谓語の研究」, 揚州大学）筆者は話し手が聞き手と関係によると、その 97 条の“大嫂”は二つ種類に分けられると思う。一つは、話し手が聞き手と親族関係を持たない場合で(66 条)、「親族呼称語の拡大化」である。もう一つは話者が使用人の場合(31 条)で、「親族語の敬語化」である。

・石亮亮（熊本大学・院）：關於對《醒世姻緣傳》中“難為”的考察

近代漢語對“難為”一般以①“使人為難”②“多虧；表感謝或稱贊”③“不易對付”④“糟蹋”四種義項詮釋，即使現代漢語對其解釋也大同小異。但是通過對近代明末清初的《醒世姻緣傳》(間稱《醒》)中“難為”的考察發現，“難為”不僅具有以上義項，還含有反諷意味和轉折意味。並且其中的“難為”在語法結構上也形式豐富。另外“難為”在《醒》中用例出現了高達 54 次，而逆序語“為難”用例只出現過一次，為了更好的理解“難為”在近代漢語中的用法，有必要對《醒》中“難為”進行全面考察。本文通過對《醒》中的“難為”在語義上和語法構造上進行比較分析從而闡明“難為”的使用範圍。

・陳相偉（熊本大学・院）：中国語の「動詞＋主語」構文について―自然現象を表す用語を中心に

一般的に、「孤立語」に属している中国語の自動詞構文は「主語＋動詞」という SV 型である。しかし、“下雨”、“下雪”、“涨潮”などのように、自然現象を表す場合、「動詞＋主語」という VS 型の組み合わせになっていることがよく見える。これも多くの日本

人が中国語を学習する時、迷っている点だ。本文は先行研究を踏まえ、中日対訳コーパスから収集した例文を利用し、自然現象を表す用語における「動詞＋主語」構文と「主語＋動詞」構文を対照しながら、「動詞＋主語」構文の特徴と成立条件を考察したい。

・江冰燕（熊本大学・院）：日本語「重い/軽い」と中国語“重/轻”の一考察―五感に関わる形容詞的用法を中心に

日本語の「重い/軽い」と中国語の“重/轻(輕)”は両言語において頻繁に使われるが、必ずしも意味用法が完全に一致するとは限らない。例えば、視覚の場合、日本語では「軽い色」という言い方があるのに対し、中国語では“轻色”はほとんど使われなく、“淡色”で表すのが規則的である。本研究では日本語の重い/軽いと中国語の重/轻(輕)の触覚・味覚・聴覚・視覚・嗅覚という五感に関わる形容詞的用法に絞り、KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」や「北京大学漢語言語学研究センターコーパス」（CCL）、及び中国明清時代における六つの小説に基づいて、用例をまとめた上、日中対照研究を行ってみる。

・井上云云（北九州市立大学・院）：不定量を表す“点（儿）”と“些”の比較研究

“点（儿）”と“些”は不定量を表す際に「数詞“一”にしか接続できない」「修飾できる品詞の範囲は広く」「名量詞と動量詞二つの語法機能を持ちかねている」などの共通点があるが、相違点もある。然し、各自表せる「量」や修飾できる名詞・動詞・形容詞の二次元範疇等の相違について全面的な研究が少なく、論点は錯綜している。本論では、“点”と“些”自体及びそれぞれの慣用形式は、具象（固形・非固形）・抽象名詞、動作・程度・変化動詞、性質・状態形容詞との修飾可否を明確にし、語彙・語法・語用の三つの面から“点”と“些”の同異点を纏める。また、“点（儿）”と“些”と日本語の「少し・ちょっと」との対応関係を考察し、両言語における不定量表現の相違を明らかにし、日本語を母語とする学習者に判断基準を提供する。

・王珍（北九州市立大学・院）：汉日语歧义表现的对照研究

歧义是对一个句子的语言意义有两种或两种以上的理解的言语现象。现代汉语的歧义研究中从赵元任起，对歧义的研究涉及到各个方面。本文在前人的研究基础上，对歧义进行分类：包括语音歧义、词汇歧义、语法歧义、语义歧义、语用歧义、修辞歧义、参照系歧义以及省略歧义等类型。借用汉语研究中的歧义分类方式对日语歧义现象进行类似分类，并且对歧义产生的条件及消除歧义的方法进行考察。另外，本文以汉语为原语，日语为译语，对汉日两种语言歧义形式的对译情况进行比较分析，按 (1) 原语有歧义→译语有歧义；(2) 原语有歧义→译语无歧义；(3) 原语无歧义→译语有歧义三种情况进行考察。

◇2016 年 12 月 3 日（土）熊本大学

・薛晨（熊本大学大学・院）：関連性理論に基づく中日ニュース見出しにおけるテンス・アスペクト形式に関する一考察―『人民日報』と『読売新聞』を中心に

本稿は、中日ニュースの見出しにおけるテンス・アスペクト形式の使用状況を調査する。調査の結果、テンス・アスペクト形式がよく省略されるということが判明した。関連性理論により、その省略現象の原因を探る。テンス・アスペクト形式の省略は、読者との心理距離を短くし、理解過程にかかわる労力を下げる働きがあるのではないか。特に、日本語の場合では、いつも漢語動詞の後ろにつく「スル」形式を省略することによって、読者に視覚的な刺激と内在的な刺激（推論・思考）を与え、関連性を高めている。

・于姝君（新潟大学・院）：“V起来AP”と

“V上去AP”の意味分析と使い分けについて

従来、方向補語“V 起来”の一つの派生義：動作を通じて、「推測」或いは「評価」をすること、についての研究は多いが、同じ意味を表す“V 上去”についての研究がまだ不十分だと考える。そしてこの派生義では“V 起来”を“V 上去”に置き換えられる場合も多いものの、両者の意味的相違に関する比較研究もまだ不十分だと思われる。本発表では、この派生義をめぐって、“V 起来”、“V 上去”と共起できる動詞を分類し、意味的相違についての分析を行う。さらに、“V 起来 AP”、“V 上去 AP”の構文を考察し、“V 起来”、“V 上去”に置き換えられない原因を究明する。

・王笑飛（新潟大学・院）：方向補語“起来”と“开”についての比較研究―「開始義」を表す場合―

方向補語“起来”と“开”、いずれも「～し始める、～し出す」という開始の意味を表すことができる。同じ構文の中でも、置き換えられる場合と置き換えられない場合がある。「開始義」を表す“起来”と“开”について、近年様々な観点から研究が行われているが、まだ検討する余地が残っていると考える。本稿では、次の二つの観点から“起来”と“开”を分析し、両者の文法的使い分けと意味的相違を解明する。(1) 方向補語“起来”と“开”それぞれの空間的な意味から時間的な意味への拡張現象について分析し、両者の意味的特徴を明らかにする。(2) 文末助詞“了”の“起来”、“开”との共起状況について分析する。

・宮下尚子（熊本大学・非）：『元刊雑劇三十種』にみえる“把”の分析―授与動詞との関係を中心に

漢語の授与動詞とそれに伴う文法現象の歴史変化検証の一端として『元刊雑劇三十種』（以下『雑』）にみえる“把”の用例を検証する。『雑』では“把”が当時の代表的な授与動詞“與”の受益者標識の役割を果たしている。太田（1956）によれば處置式を導く介詞“把”はすでに唐代にあった。『雑』の“把”も介詞用例が主であり、現代の“把”構文に共通する用例の他、“把水騾住”の“把”は現代語では結果補語“在”に相当すると考えられる。動詞では“把盞”等の他、“你不把俺一分錢才”（私等に僅かな財物もくれない）の様な授与動詞の用例があるが、数例に過ぎない。

・石亮亮（熊本大学・院）：『醒世姻緣傳』の“喜歡”と“歡喜”について

現代共通語の会話では喜ぶ気持ちを表現する時一般に“開心”を口頭語で使用し、地の文では“愉快”を使う。本稿は清初期『醒世姻緣傳』（略称『醒』、下同）の“喜歡”と“歡喜”を中心に口頭語と地の文では一体どちらが一般的か、また両者の機能上の区別と特徴にも言及する。『醒』の会話文では“喜歡”の用例は、全用例 79 のうち 36 例を検出した。地の文では“歡喜”の用例は全用例 45 の中に 41 例を検出した。

・趙葵欣（福岡大学）：《官话指南》的助动词系统-十九世纪末汉语官话助动词系列研究之三

本文着眼于汉语助动词历史演变，考察《官话指南》（1881）的助动词系统。整理了该书所有十七个助动词及其各种情态用法，指出该书助动词系统的一些特点，如意愿类动力情态主要用“要、愿意”，“想”助动词用法尚未发达；能性类动力情态没有“能够”；应该类道义情态主要用“该当、应当”，“应该”仍不见等。对比李明（2001/2016）、趙葵欣（2015）的研究成果，文章还描述了从清末到现代汉语助动词演变的一些特征，如道义情态助动词呈现明显简化趋势、“能”在十九世纪末期还保留有认识情态用法等。对该书助动词系统的考察，与趙葵欣（2015）的研究相互印证，能更加细化汉语助动词在近代的演变过程。

・張恩培（熊本大学・院）：“跳、躍、騰”について

“跳、躍、騰”は「二つの足が地面から離れて、上にあるいは前に移動する」という共通の意味がある。この三つの動詞はよく似ていて、母語話者である中国人にとっても使用上曖昧になることが少なくない。ましてや、外国人の中国語学習者にとって、その運用方法は非常に難しい。そこで、本稿は『醒世姻縁伝』(略称『醒』。以下同じ)における“跳、躍、騰”の用例を分析し、まとめたうえ、類義語の視点から、三者の共通点と相違点を分析し、具体的な意味用法を明らかにする。

・王姝茵（熊本大学・院）：性別からの『醒世姻縁伝』親族呼称語の使用の差異への考察

『醒世姻縁伝』(略称『醒』。以下同じ)では、様々な親族語が使われている。使用法から分類すると、「面と向かっての呼称」、「陰での呼称」、「自分を呼ぶこと及び叙述に用いる呼称」、「会話の第三者などを指示する呼称」の四種類に分けられる。本稿は『醒』の親族呼称語を調査し、性別による使用法と使用した相手などから、『醒』の親族呼称語の使用法を考察する。それによりまず、清代初期の山東方言の親族呼称語についての用法を究明し、今後の近世漢語全体の親族呼称語の使用法を検討するための一つの手掛かりとしたい。

・木村裕章（東亜大学）：中国語における目的語前置と動詞の他動性について

中国語は基本的に「S＋V＋O」の語順をとるが、その直接目的語を動詞に前置させることができる。このような目的語前置にはいくつかの形式があるが、これらの文の適格性を文中の動詞の他動性を検証することで判断し、動詞分類に関する考察を行う。具体的には、『剧本』にあるシナリオの会話文の中から目的語を前置した主題文・目的語前置文・“把”構文を収集し、それらに使用されている動詞の他動性の強弱や前置された成分の指示性を比較し、使用されている動詞の他動性との関連性についても検討を行う。全体的な傾向としては、主題文・目的語前置文よりも“把”構文に使用される動詞の方に他動性が高いという結論が得られた。

会則改正のお知らせ

■ 2016 年 11 月 12 日、立命館アジア太平洋大学で開催された評議会での議決をへて、総会において会則の改正が承認されました。

改正前	改正後
日本中国語学会会則　第３章 役員 第９条［役員の任期］ 1. 会長，副会長の任期は 2 年とし，再任は認めない。	1. 会長，副会長の任期は 2 年とし，会長の再任は認めない。

【改正理由】副会長については再任を妨げず，人材の有効活用を期したい。なお副会長は理事のなかから任命されるので，理事の任期にかんする規定：１期２年，連続２期までとし，間に２年をおいて再任されることを妨げない，が適用されることになる。

【特記事項】総会にて、本改正が改正前の副会長経験者にも適用されるのか、という質問があった。理事会にて検討した結果、通常は規則の改正は遡及適用をしないが、該当者が数名に限定されるので、人材の有効活用という改正の精神に照らし、「遡及適用については、本人の意志を確認した上で、理事会の承認を必要とする」という内容を、理事会申し合わせとして確認しておくこととなった。

会議報告

■ 2016 年度第 2 回理事会

日時：2016 年 11 月 11 日（金）16 時～18 時

場所：ホテルエール 10 階会議室［別府市北浜 2 丁目 14-35］

出席者：木津祐子（会長）；佐々木勲人（副会長・編集委員長）；竹越孝、古川裕、三宅登之、山崎直樹（以上理事）；宮本徹（大会運営委員長）；鈴木慎吾（ウェブリソース委員長）；池田巧、島津幸子、中西裕樹（以上幹事）

欠席者：遠藤光暁、加藤晴子（以上理事）；平田昌司（辞典編纂委員長）

■ 2016 年度評議会

日時：2016 年 11 月 12 日（土）10 時 15 分～11 時 45 分

場所：立命館アジア太平洋大学 F 棟 2 階 F201

出席者：構成員 44 (+2) 名（定数 57 (+3) 名［前年度監査２＋会計担当幹事１］）

■ 2016 年度総会

日時：2016 年 11 月 12 日［土］17 時 30 分～18 時 30 分

場所：立命館アジア太平洋大学ミレニアムホール

【議長選出】

議長に植田均会員（熊本大学）、土屋育子会員（東北大学）を選出した。

【報告事項】

1. 一般報告

1.1 会員動向（10 月 1 日現在）

中西幹事より以下の報告があった。

・会員数：（2015 年 10 月 1 日から 1 年間の増減：住所不明者、年度末退会予定者を含む）

			増減
総会員数（賛助除く）		1189 名	－60
（内訳）	顧問	5 名	±0
	名誉会員	23 名	－1
	通常会員	731 名	－33
	ネット会員	340 名	＋3
	団体会員	8 名	±0
	海外会員	82 名	－29
賛助会員		24 社	±0

・〔昨年度除籍者〕33 名（国内会員 21 名 / 海外会員 12 名）［2015 年 12 月 7 日付］

・〔今年度除籍予定者〕54 名（国内会員 35 名 / 海外会員 19 名）

・〔ご逝去〕3 名（中山時子名誉会員、慶谷壽信顧問、寺尾剛会員）

＊ 会員動向については、直近の数字ではなく、

4 月 1 日付の状況を春の理事会に、10 月 1 日の状況を秋の理事会に報告する。[除籍者は 10 月中に確定]

1.2. 支部例会関連

中西幹事より以下の報告があった。

・過去一年間の実績は『中国語学』263 号「彙報」を参照。

・支部例会開催通知はメールに移行、ハガキ希望の方には郵送を継続。

2. 編集委員会報告

佐々木委員長より以下の報告があった。

・『中国語学』第 263 号は、2016 年 10 月 31 日に 1,470 部を発行した。

・ 学会奨励賞受賞者として以下の 2 名を推薦した。

八木堅二（京都大学・非常勤講師）

「沁源交口方言における単字調の変化過程」

宮島和也(東京大学人文社会系研究科・院生)

「戦国楚・秦における前置詞「于」「於」をめぐって」

・ 新旧委員の交代

任期満了：小野秀樹、沈力、佐々木勲人、松江崇

再任：秋谷裕幸、石崎博志、王亜新、橋本永貢子

新任：遠藤雅裕、竹越孝、丸尾誠、雷桂林

・『中国語学』263 号に会則を掲載したことについて補足説明があった。

3. ウェブリソース委員会報告

鈴木委員長より以下の報告があった。

・メルマガは現在 870 部を配信している。

・中国語学関連データベースを作成、試験運用を開始。近日公開予定。

・石崎博志委員、植屋高史委員が今年度末で任期満了。後任は任期終了までに決定し、理事会に報告する予定。

4. 大会運営委員会報告

宮本委員長より以下の報告があった。

4.1. 委員の交代について

任期満了：于康、更科慎一、前田真砂美

再任：飯田真紀、鈴木慶夏、千葉謙悟、張盛開、三宅登之、宮本徹

新任：荒木典子、吉川雅之、李佳樑、石村広（次年度大会開催校選出：任期 1 年）

4.2. 第 66 回全国大会審査結果

・応募総数 86 件。うち有効応募総数 83 件（受付期間外の応募による不受理 2 件、規定違反による失格 1 件)。審査の結果、口頭発表 49 件、ポスター発表 13 件の計 62 件を採択した。不採択数は 21 件であった。

4.3. 大会スケジュールの変更

・7 月 29 日のプログラム公表後、下記の点についてプログラムに変更が生じた。

1）口頭発表の発表者 1 名より、来日スケジュールの都合上、発表時刻を変更してもらいたい旨の依頼があった。開催校と協議の結果、汲むべき事情があると認め、第 1 会場の発表順序を一部入れ替えた。〔8 月 16 日〕

2）ポスター発表の筆頭発表者 1 名より、本務校における規定の変更により来日を取りやめざるを得なくなったので、共同発表者に当日の発表を任せたい旨の申し出があった。委員会において審議した結果、やむを得ない事情と認め、特例的に共同発表者による発表を認めた。〔10 月 23 日〕

4.4. その他

・予稿集の原稿はすべて期限内に提出された。

・今年度大会から実験的に予稿集の編集作業に委員会が関与することとした。さしあたっては委員の中から 1 名を「編集サポート」担当として指名し、開催校の依頼に基づいて編集の実務に従事した。

5. 辞典編纂委員会報告

平田委員長より編集作業の遅延について報告があった。

6. 次期大会開催校の決定

木津会長より、中央大学多摩キャンパス（八王子市）において 2017 年 11 月 11 日（土)、12 日(日)の日程で開催する旨の報告があり、開催校の石村広会員より挨拶があった。

7. 日本中国学会「学界展望」語学部門について

日本中国学会「学界展望」語学部門の編集執筆依頼の打診があったこと、その経緯と現状、および対応方針について木津会長より報告があった。

7.1. 依頼の概要

日本中国学会が機関誌『日本中国学会報』及び学会 web サイトに公開している「学界展望」語学部門の編集と執筆を、2018 年度より中国語学会に責任編集を担当願うことは可能かどうか。

7.2. 具体的な内容

(1) 日本中国学会の「学界展望」語学部門は日本中国語学会との共同企画としたい。

(2) 公開は、a. 目録を日本中国学会 web サイトに公開、b. 展望（講評）を『日本中国学会報』に掲載する。中国語学会としての公開方法は、語学会の判断で行う。

(3)「学界展望」語学部門作成にかかる費用は、すべて日中学会が負担する。

以上の提示条件にもとづき理事会で慎重に検討した結果、積極的に引き受ける方針を決定し、評議会に報告して御意見をいただいた。具体的な対応については、今後ひきつづき検討を重ねていきたい旨の説明があった。

8. 会員種別の適正化について

木津会長より、まず通常会員のほかに「ネット会員」が設置された経緯と現状についての説明があった。ネット会員は、2011 年度より改正施行された特別規定により、インターネット利用の普及を目的として、送付物がないかわりに千円の割引という優遇措置を暫定的に定めたものであり、[なお，この特別規定は継続の適否も含めて，2 年ごとに見直しを行うこととする。]という附記が添えられている。その後、メールとネットによる情報発信が一般化し、会員情報の管理も e-naf によるネット上でのデータ処理が導入された。一般会員に対しても、郵送物はできるだけ廃止する方向に進んでいる。こうした現状に鑑み、「ネット会員」という種別を廃し、通常会員（会費 6000 円）に一本化したい。周知期間（3 年）を設け、来年の総会で特別規定を改正する予定で検討を進める旨の報告があった。

9. その他

宮本大会運営委員長より、次期（2018 年度）大会開催校を募集している旨のアナウンスがあった。

【審議事項】

1. 会則の改正について

木津会長より、日本中国語学会会則第 9 条［役員の任期］について改正の提案があり、承認された。詳細は本号「会則改正のお知らせ」を参照。

2. 予算案・決算案

2.1. 2015 年度会計決算案（資料参照）

紺野前幹事による報告と説明、及び森宏子・奥村佳代子会計監査による監査報告があり、報告の通り承認された。

2.2. 2017 年度会計予算案（同上）

島津幹事による提案と説明があり、原案の通り承認された。

2015 年度会計決算書（2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日）2016 年 11 月 12 日総会承認

＜収入＞（単位:円）	予算	決算
前年度繰越金	3,272,139	9,229,241
積立金	2,480,000	2,480,000
通常会員･海外会員会費収入	6,500,000	6,410,000
賛助会員会費収入	690,000	690,000
『中国語学』売上金	400,000	348,223
予稿集売上金	450,000	616,032
印税(著作権使用料)		26,000
通常貯金利子		1,200
別刷追加分料金		7,184
計	13,792,139	19,807,880
＜支出＞	予算	決算
会誌印刷費	2,300,000	1,969,742
予稿集印刷費	500,000	836,784
大会助成費	300,000	300,000
支部活動助成費	450,000	107,888
通信費	500,000	520,212
事務費	2,000,000	1,887,677
大会事務費	300,000	569,932
学会連合等年会費	42,000	42,000
事務局費	350,000	346,360
編集委員会経費	120,000	78,538
ウェブリソース委員会経費	120,000	75,150
ホームページ関連経費	180,000	42,667
大会運営委員会経費	200,000	155,000
辞典編纂委員会経費	180,000	33,000
旅費交通費	600,000	648,000
会議費等雑費	180,000	148,328
学会奨励賞	100,000	100,000
選挙関連経費	100,000	0
積立金	2,520,000	2,520,000
［内訳］		
記念大会積立金（30 万）		
事務委託関係積立金（122 万）		
ウェブサイト構築積立金（50 万）		
国際会議開催支援積立金（50 万）		
予備費	2,750,139	9,426,602
計	13,792,139	19,807,880

監査の結果、経理内容は適正であり、経理諸表は適確に処理されていることを認めます。

2016 年 5 月 14 日

2015 年度会計監査　森　　宏子
2015 年度会計監査　奥村佳代子

2017 年度会計予算案（2017 年 4 月～2018 年 3 月）　2016 年 11 月 12 日総会承認

＜収入＞	
前年度繰越金	1,558,139
積立からの繰入金	2,560,000
通常会員会費収入	6,500,000
賛助会員会費収入	690,000
『中国語学』売上金	400,000
予稿集売上金	450,000
計	12,158,139

＜支出＞	（単位:円）
会誌印刷費	2,000,000
予稿集印刷費	800,000
大会助成費	300,000
支部活動助成費	450,000
通信費	500,000
事務費	2,000,000
大会事務費	300,000
学会連合等年会費	42,000
事務局費	350,000
編集委員会経費	120,000
ウェブリソース委員会経費	120,000
ホームページ関連経費	180,000
大会運営委員会経費	220,000
辞典編纂委員会経費	180,000
旅費交通費	600,000
会議費等雑費	180,000
学会奨励賞	100,000
選挙関連費	100,000
積立金	2,600,000
［内訳］	
記念大会積立金（34 万）	
事務委託関係積立金（126 万）	
ウェブサイト構築等積立金（50 万）	
国際会議開催支援積立金（50 万）	
予備費	1,016,139
計	12,158,139

例会および全国大会開催のお知らせ

今年度の例会実施予定

各支部における今後の例会実施予定は次のようになっています。

北陸支部：2017 年 3 月 18 日

支部例会の発表者、参会者ともに歓迎します。発表者の方には発表要旨（300 字以内）の事前提出をお願いしています。この要旨は、学会ウェブサイト上の例会案内のページで紹介し、年に 2 回発行の学会ニューズレターにも掲載されます。

なお、開催予定は変更になることがありますので、詳細は各支部例会世話人までお問い合わせ下さい。担当者の連絡先については、学会ウェブサイトをご参照下さい。

（事務局）

第 67 回全国大会開催のお知らせ

日本中国語学会第 67 回全国大会は、2017 年 11 月 11 日（土）、12 日（日）に中央大学（八王子市）にて開催されます。ワークショップの応募要項は 2017 年 1 月末までに、また一般研究発表の応募要項は 2017 年 4 月初旬までに学会ウェブサイトに掲載される予定です。

（第 67 回全国大会準備会）

事務局からのお知らせ

■ **住所不明の会員**

お知り合いの方がおられましたら、ご連絡をお願いします。

荒屋 勸、伊藤 敬一、井上 貴仁、上野 倫代、大塚 秀明、韓 涛、許 羅莎、玄 宜青、呉 沛珊、小金澤 豊、小鹿 洋子、朱 新建、髙岸 晃夫、張 金平、張 芃蕾、鄭 磊、西原 一幸、長谷川 良一、潘 藝梅、三野 園子、李 孟娟、張 群、石 慧敏、呉 睿純、李 嵩、東 会娟、崔 文燕、申 荷麗、楊 華、陳 倩、張 睿、申 祐先、王 正、劉 春芳、董 菁、谷 恵中、羅 希、許 挺傑、樊 涛、金 香、劉 宇飛、張 婷婷、范 碧琳、王 棋、崔 春子、李 勁栄、沈 庶英、梅 佳　（敬称略）

■ 2016 年度会費納入のお願い

会費未納の方には、11月に振込用紙を同封して納入依頼のご連絡をお送りしました。年会費（一般会員6,000円、ネット会員5,000円）を最寄りの郵便局からお振込下さい。速やかにご入金下さいますよう、御協力をお願いします。

郵便振替　加入者名：日本中国語学会
口座番号：00980-6-282216

■ 退会について

退会は有資格年度の会費納付が前提となっています。退会希望の方は、必ず会費納付後の年度内にお申し出下さい。３月末日までにお申し出がない場合には、会員資格が新年度に継続されますので、ご注意ください。

■ 顧問・名誉会員の推挙

顧問・名誉会員の推挙は、推薦文を添えて2017年9月30日までに学会事務局宛にお願いします。

■ 予稿集の販売

過去の大会予稿集は好文出版にてお求めになれます。第61回までは1500円、それ以降は2000円となっています。詳しくは学会ウェブサイトをご覧下さい。在庫につきましては好文出版（order@kohbun.co.jp）に直接お問い合わせ下さい。

■ 事務局の連絡先

各会員の登録情報は、学会ウェブサイト（http://www.chilin.jp/）内の e-naf（オンライン会員情報管理システム）から、会員ご自身でログインして確認と更新ができます。事務局への問合せは、学会ウェブサイトの「お問い合わせ」ページをご利用下さい。

事務局への郵便物は、下記あてにお願いします。

〒606-8501
京都市左京区吉田本町
京都大学人文科学研究所内
日本中国語学会事務局

日本中国語学会々報　2016 年秋季
（年二回発行）
発行者：日本中国語学会事務局
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学人文科学研究所内
E-mail: jimukyok_clsj@chilin.jp
URL: http://www.chilin.jp/
発行日：2016 年 12 月 20 日